

が甚だ少いと云ふことは、これ労働者兒女と駄菓子屋との関係を極めてよく語るものと云はねばならぬのである。蓋し労働者兒女は、他の階級の兒女に比して、より多くの財政的獨立（兩親よりの）を有するものあり、これ駄菓子屋と最も親密なる關係に立つ最も根本的原因ではあるまいか。實に長屋の列びある路次の入口には駄菓子屋店を開くもの多く、甚しき場合には道路の兩端に、しかも各端の兩側に、駄菓子屋を見ることさへあるのであつて、兒童はその駄菓子屋を本據となして、其の附近にて、多數集まつて遊び戯れある有様に接するのである。

第二節 労働者兒女と遊戯

労働者階級の兒女が常に如何なる遊戯を爲しつゝあるかを知らんと欲して、已に述たる如く、大正八年七月中、月島第一第二小學校四五年級在學兒童一千七百七十三名（内労働者兒女六百五十九名）に對し「どういふことをして遊ぶのが好きですか」といふ質問を提示し、これに對する筆答を纏めたのである。尙ほ之れと對照せしめんと欲して神田區東松下町千櫻小學校四五年級在學兒童四三五名についても亦同様の調査を行つた。

A 第一二一號 男生徒遊戯調査表

（大正八年七月中調査）

戶外遊戯	屋内遊戯	不詳	無	雜	計
六三九	一三九	三三	四	一	八〇五
一六五	六三	八	二	一	二四七
三五四	八三	一四	二	一	四五三
七九四	一七三	二八	〇五	一	一〇〇〇
六六八	二五五	七三	一	〇四	一〇〇〇
七六三	一八三	三二	〇四	一	一〇〇〇

A 第一二二號

女生徒遊戯調査表

（大正八年七月中調査）

戶外遊戯	屋内遊戯	不詳	無	雜	計
二三八	三四〇	二九	一	四	六〇二
三七	一八六	一六	一	一	二四〇
一三四	一七九	二〇	一	二	三三五
三七九	五六五	四八	〇三	〇六	一〇〇〇
一五四	七七五	六七	〇四	一	一〇〇〇
四〇〇	五三四	六〇	一	〇六	一〇〇〇

先づ注意し置くことは兒童の數と計の數との合致せざることであつて、これは同一の兒童にして、

二種以上の遊戯を上げたるものあり、而して夫等の遊戯を夫々に算入したるが爲めである。以下に準ずるものと知るべきである。扱て遊戯には年齢の關係、季節の關係、大いに影響を及ぼすものであることは、言ふまでもない所であつて、夫等に對して一々精細なる攻究をなすことは必要なる事柄であるけれども、此調査元來の目的よりは餘りに逸したる嫌あるを以て、本節には大體の傾向を討究するに止め度いと思ふ。

右の兩表によれば、月島は男女兒とも戶外遊戯に於て神田に遙かに勝つてゐる。これは月島が神田に比して往來の雜踏せざることを、調査の時期初夏季に當り、水泳場の開かるゝものあり、其他海岸に於ける遊戯等に適しゐたること、が最大の原因であると思はるゝけれども、又一は勞働者の居住狀態等が兒女の室内遊戯に不都合多きことあるにもよるのではあるまいか。

扱て次にこの戶外遊戯及び室内遊戯を其の遊戯の主體の數を以て分類する時は、

A 第一二三號

男生徒遊戯調査表

(大正八年七月中調査)

月島男生徒 神田同	戶外遊戯			室内遊戯			計
	團體	對人	單獨	團體	對人	單獨	
三三二	六五	二五三	二五	四〇	三三	六七	七七八
一〇三	一三	五二	一五	一六	三三	三三	三三八

月島勞働者の男兒 月島男生徒 神田同	戶外遊戯			室内遊戯			計
	團體	對人	單獨	團體	對人	單獨	
一八四	三五	一三五	二四	八	四〇	四〇	四三六
四一三	八四	三三五	五二	四二	八六	八六	一〇〇〇
四四七	五三	三三四	六六	七〇	一四〇	一四〇	一〇〇〇
四三三	八〇	三三〇	五五	四一	九二	九二	一〇〇〇

A 第一二四號

女生徒遊戯調査表

(大正八年七月中調査)

月島女生徒 神田同	戶外遊戯			室内遊戯			計
	團體	對人	單獨	團體	對人	單獨	
一八四	九	三五	二六七	九	六四	六四	五六八
二六	一	一〇	一三四	一	五二	五二	二二三
一一三	四	一八	一四二	七	三二	三二	三二三

右兩表中、「對人遊戯」には多くは二人にてなすを原則とし、勝敗を目標とするもの多き種類のもの、例へば「角力」「駢比」「柔道」「將棋」等の如きものである。

男兒に於ては、戶外に於ける團體遊戯最も割合高く、女兒にては室内に於ける團體遊戯最も多し。

然るに男児にては、神田は室内に於ける單獨遊戯多きに、月島にては戶外に於ける單獨遊戯が多い。女兒にては神田は室内に於ける單獨遊戯、月島よりは遙かに多いのである。

月島に於ける労働者の男児は、戶外に於ける團體遊戯と單獨遊戯とを好み、その女兒は室内に於ける團體遊戯を最も多く好むことは、月島全體と神田と異らぬけれども、その割合はそれ程甚しくなく、その代りに戶外に於ける團體遊戯に於ては三者中最高位を占めてゐる。要之月島の労働者兒女には一般に戶外的遊戯の要素が強い様である。

第三節 労働者兒女と興行物

労働者階級の兒女と興行物との關係を見んが爲めに、三大興行物たる「活動寫眞」「芝居」「寄席」に關し、前節同様に小學校兒童に就いて調査した結果は次の如くである。

A 第一二五號

男生徒と興行物との關係表

(大正八年七月中調査)

男 生	活動寫眞		芝		居		寄		席	
	観しこと 無きもの	あるもの	行きし こと無し	有	不 明	行きし こと無し	有	不 明	有	不 明
月島 男生徒	一〇	六三七	五三	五九四	一	一九〇	四五三	一	一	五
神田 同	三	二二三	三四	一八一	一	八二	一三二	一	一	三
月島労働者の男児	六	三六四	二七	三四三	一	二〇	二四九	一	一	一

無きもの の割合 (%)	活動寫眞		芝		居		寄		席	
	観しこと 無きもの	あるもの	行きし こと無し	有	不 明	行きし こと無し	有	不 明	有	不 明
月島 男生徒	一五	四五五	八〇	四五三	二	二九四	三五	一	一	一
神田 同	一四	二〇七	一五八	一八九	一	三七七	一三四	一	一	一
月島労働者の男児	一六	二五〇	七三	二四六	一	三三四	一八六	一	一	一

A 第一二六號

女生徒と興行物との關係

(大正八年七月中調査)

無きもの の割合 (%)	活動寫眞		芝		居		寄		席	
	観しこと 無きもの	あるもの	行きし こと無し	有	不 明	行きし こと無し	有	不 明	有	不 明
月島 女生徒	七二	四四五	七二	四五三	二	二〇〇	三五	一	一	一
神田 同	三三	二〇七	三三	一八九	一	八五	一三四	一	一	一
月島労働者の女兒	三九	二五〇	四三	二四六	一	一〇三	一八六	一	一	一
月島 女生徒	一三五	四五五	一三五	四五三	一	三八〇	三五	一	一	一
神田 同	五九	二〇七	一四一	一八九	一	三六六	一三四	一	一	一
月島労働者の女兒	一三五	二五〇	一四五	二四六	一	三五三	一八六	一	一	一

一體に女兒は男児に比し興行場に行かざりしもの割合が高い。

活動寫眞と芝居及び寄席とでは子供に對する關係に差異がある。それは芝居及寄席へは兒童が單獨にて入場するは先づ絶無と稱し得べきも、活動寫眞は兒童の單獨入場を考へ得べきの點にある。

而して活動寫眞に於ては、男女兒とも月島(殊に労働者)は神田よりも觀覽せざるもの割合が高

い。これ月島には島内に活動寫眞館なきことが有力なる原因であるとも思はるゝが、階級及び職業の關係も表はれるのではあるまいか。

之に反して芝居及び寄席に於ては、行きしこと無きものゝ割合、月島の方遙かに神田よりも低いのである。これは芝居及び寄席に父母兄弟の赴く割合神田よりも多きことを示すものであつて、商業關係者の多き神田須田町附近と工業労働者多き月島とに於ける生活と、寄席及び芝居との關係の一面を現はせるものではあるまいか。

要之、労働者の兒女は活動寫眞を見ざりしものゝ數他の階級及び職業の兒女に比し多きが、父母兄弟に同伴されて赴く芝居及び寄席へは夫等に比して寧ろ多く赴けるものがあるが如くである。

第四節 労働者兒女の趣味性

労働者階級兒女の趣味性の傾向を知らんと欲して、前同様小學校兒童に就いて「面白いと思つたことを書け」といふ題を與へ、その筆答を分類して得たるものが左表である。

A 第一二七號 男生徒の趣味性調査表 (大正八年七月中調査)

月島男生	男生	
	室內遊戯	戶外遊戯
三六	二七	二四
		五三
		一九三
		七三
		七
		三〇
		一七
		三三
		七三六

月島男生徒	神田同	
	室內遊戯	戶外遊戯
二九	四七	二九
三六	五五	三〇
三三	三七	三三
二九	三六	二九
六三	三〇	六三
二七	八九	二七
一三	一〇	一三
〇三	〇四	〇三
二九	六八	二九
三一	二二	三一
四六	三四	四六
一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇

A 第一二八號 女生徒の趣味性調査表 (大正八年七月中調査)

月島女生徒	神田同	
	室內遊戯	戶外遊戯
八三	二六	八三
一五	一〇	一五
二九	三六	二九
八六	一〇	八六
四一	二二	四一
三四	八	三四
五八	二二	五八
二	四	二
一六	一八	一六
一四	一五	一四
一八	一六	一八
三〇	三五	三〇
一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇

趣味性の差及び發達は男女性の差以外、年齢の差も影響する處大であるが、此處にはそれらにまで立ち入らぬことにした。尙ほ此處に割引して考へられんことを欲する事柄は本調査が夏期に行はれたる

ことゝ、尙ほ月島にては本調査の前日及前々日に佃島の祭禮ありしことゝである。其の外同一児童にして二種以上の答を記したるものは、これを夫々に計算したることである。

戶外遊戯は月島神田、男女児の差別なく、最もその趣味性に合するものであることが分る。然しながら戶外遊戯に自由なる月島に於ては、男女とも之れを愛する度神田程に高からずして、赴くに比較的難い興行物は之を好むこと神田より遙かに強い。之に反し神田にては男女とも興行物觀覽に比較的便宜ありながら、これを好むことは月島の如くならず、却つて戶外遊戯を好むこと月島以上であると云ふことは、甚だ面白い對照と云はねばならぬのである。而して此の關係が一層月島の労働者兒女殊に男兒に現はれてゐることは注意すべきことである。室内遊戯を好むこと、月島は男女とも神田の如くならざるは、月島の土地の狀況による所大ならんも、彼等の家庭生活が彼等に與ふる慰安に缺くる所あるによるのではあるまいか。滑稽なる言動に接し之を面白がる兒童が、労働者の兒女の間、可成りに多いことも亦注目し値する點であると思ふ。

第五節 労働者兒女の理想

労働者の兒女が將來に如何なる理想を抱いてゐるか、その境遇の影響が如何程彼等の將來の希望の上に現はれてゐるかを驗せんとして、已に述べたるが如き小學校に於て「大きくなつたら何にならうと思ひますか」てふ質問について答へしめたのである。その得たる結果は左表の如くである。

A 第一二九號

男生徒の理想調査表

(大正八年七月中調査)

男 生	漁夫及 船員	工業 關係者	商業 關係者	俸給生 活者知 識階級	豪き人 (軍人)	奉公	雜	未定 不詳	計
月島男生	二二	一九	二四	二五	二六	二二	一八	五三	六四七
神田同	一	二四	八〇	二四	六七	一	一一	八	二二五
月島労働者男兒	七	九〇	五六	七	一六五	一四	四	二七	三七〇
月島男生徒	一七	一八	二九	三九	四一	三三	一三	八二	一〇〇〇
神田同	一	二二	三七	二二	三一	〇五	五	三七	一〇〇〇
月島男労働者	一九	二四	一五	一九	四四	三八	一一	七三	一〇〇〇
比百分									

A 第一三〇號

女生徒の理想調査表

(大正八年七月中調査)

女 生	工業 關係者	商業 關係者	髪結仕 立屋匠	俸給生 活者知 識階級	豪い人	良妻 賢母	奉公	雜	未定 不詳	計
月島女生	三	七〇	一四五	六五	一〇七	一一	四〇	四一	四三	五二六
神田同	一	四六	四五	二四	三〇	二五	三	一七	三〇	二二〇
月島労働者女兒	二	三五	八〇	四二	六三	七	三五	一七	一九	二八九
月島女生徒	〇六	一三三	二七六	一二四	二〇三	二三	七六	七八	八三	一〇〇〇
比百分										

比		分	
神田	月島	0.7	20.9
同	同	1.3	20.5
者	者	2.7	10.9
の	の	1.4	23.6
女	女	2.2	11.4
勞	勞	2.4	1.4
働	働	8.7	7.7
兒	兒	5.9	13.6
備	備	6.6	100.0
			100.0

二五二

工業を目的とするものが月島に多く、商業を目標とするものが神田に多いことは、土地の職業の關係上正に然るべきことである。漫然と豪い人とならんと欲するものが月島殊に労働者の兒女に多いことは注意すべき點である。男兒に於て俸給生活者、知識階級を希望するものが神田の方に多いことも當然のことであると思はる。奉公に行くことを望むものが神田には甚だ少くして月島殊に労働者の兒女に割合に多いことも亦注目し値する。女兒にて良妻賢母を望むものが、神田に多くして月島に於ては甚だ少きことも彼等の生活の一面を言ひ表はせるものではあるまいか。又女髪結仕立屋等の如き比較的卑近にして自由を有するらしく思はるゝ職業を望むものが、月島特に労働者の女兒に多いことも面白い現象である。

今、特に労働者の兒女のみを取つて、其の理想とする所を更らに詳細に示せば、次の如きものである。

▲第一三一號 労働者兒女の理想調査表 (大正八年七月中調査)

男生		女生	
實數	百分比	實數	百分比
漁師	0.5	女工	0.3
船乗	1.5	工場主	0.3
職工	4.4	商人	2.2
職人	6.5	女髪結	8.3
工場主	4.2	仕立屋	6.3
技師	2.4	裁縫師	2.4
商人	4.5	遊藝師	1.7
社會員	0.5	電話交換手	2.4
教師	0.3	看護婦	2.0
醫師	—	産産	0.3
官吏	—	女醫	0.3
發明家	—	教師	8.3
學者	1.2	學者	1.0
軍人	4.0	金持	0.6
金持	4.0	豪い人	0.6
豪い人	0.5	おんさん	1.4
小僧	0.5	おんさん	0.6
給仕	1.1	おんさん	0.3
雜	1.1	女中	8.3
未定	5.9	給仕	1.1
不詳	1.4	裁縫古者	4.5
計	37.0	藝者	0.3
		雜	1.0
		未定	3.5
		不詳	3.2
		計	28.9

第十七章 月島に於ける教育狀況

第一節 小學校教育

月島に於ける教育施設は、(一)小學校二、(二)尋常夜學校一、(三)工業補習學校一、(四)市立圖書館一、及び(五)私立幼稚園一である。

月島現住人口に對する學齡兒童の比は大正五年の九・〇%より大正六年の八・八%、大正七年の一〇・二%へと増加を示し、大正七年度の學齡兒童數は三千百十七である。(A第一三二號)
 在學兒童數は大正七年度、二千六百九十にして、大正五年の二千四百九十九に比し、八%の増加である。(A第一三三號)

A第一三一號 月島現住人口及學齡兒童

年 度	人 口	學齡兒童中就學の始 期に達したるもの	人口に對する百分比
大 正 五 年	計 男 一七、七六五 計 女 一四、二〇五 計 三、九七〇		一、五六六 一、三三五 二、八九一
大 正 六 年	計 男 一八、三三三 計 女 一四、六八四 計 三、〇一六		一、四九九 一、三八三 二、八七二
大 正 七 年	計 男 一七、九四五 計 女 一三、七六三 計 三、七〇八		一、六七一 一、五三〇 三、二一七

A第一三三號 在學兒童數

年 次	男	女	計	增加率(大正五年の 百に對し)
大 正 五 年	一、三三七	一、一六三	二、四九九	一〇〇
同 六 年	一、三三二	一、二三五	二、五五六	一〇三
同 七 年	一、三八八	一、三〇三	二、六九〇	一〇八

A第一三三號 入學兒童數

年 次	第一學年	第二學年以上	計	全數百中第二學年 以上入學兒童數の 占むる割合
大 正 六 年	二四二	八七	三三八	二六・五%

大正七年	二四五
同 八年	三五三
大正七年	八六
同 八年	八二
大正七年	三三一
同 八年	四三四
大正七年	二五九
同 八年	一八六

二五六

A 第一三四號 卒業兒童在校年數

實 數	比 分 百		
	大正六年	同 七年	同 八年
一箇年	四 七 六	七 六 四	一 七
二箇年	七 九 七	九 九 七	二 五
三箇年	三 三 三	六 九 三	四 八
四箇年	一 六	四 四 四	二 四
五箇年	一 二	三 二	四
六箇年	二 二	五 六	一 五
合 計	四 九 四	五 八 八	八 二 四
大正六年	四 九 四	五 八 八	八 二 四
同 七年	四 九 四	五 八 八	八 二 四
同 八年	四 九 四	五 八 八	八 二 四
合 計	六 三 三	九 二 九	一 七 八

第二節 月島尋常夜學校

晝間通學し得ざる者、就學期を後れ普通の課程を踏み得ざる者、其他特殊の事情ある者に對し、夜

間簡易速成的に小學教育を與ふる施設である。その學ぶ者の殆どすべてが晝間勞働に従へるものなることは勿論である。六箇月を以て一期とし、六期を以て普通教育の全課程を修了せしむる仕組であり、入學期は三月及九月である。

大正八年各期學年末在籍兒童數、上期男四十九、女二十九、下期男三十八、女二十一にして、其年齢に就て見るに二期を通算し、十四歳乃至十八歳なる者八十六、十九歳以上なる者八、他は十歳乃至十三歳である。

在學兒童の職業に關する大正六年下期より大正八年に亘る調査（A 第一三五號）に就て見るに無職なる者は一部分であつて、大部分は晝間何等かの職業に従ひつゝある。従て晝間の勞働より來る疲勞、且つ普通々學兒童よりもより複雑なるべき環境は、規則正しき出席を妨げ、普通小學校に於ける出席率九四%乃至九八%なるに反し、四八%乃至八六%を示して居る。（大正八年度最高及最低）

A 第一三五號 兒童現在職業調査

年 次	無 職		女 工		家事手傳		活版工		職 工		給 仕		小 僧		其 他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
大正六年下	一六	三〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同 七年上	二二	三四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同 七年下	九	一五	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

二五七

時間半なる者四人、八時間乃至八時間半なる者十二人、九時間乃至九時間半なる者八人、十時間以上なる者八人、賃銀は日給に依るもの二三人、月給に依る者九人であつて、日給額三〇——三九錢一人、四〇——四九錢七人、五〇——五九錢八人、六〇錢以上六人、月額一二——一五圓二人、一六——二〇圓六人、二圓以上一人である。

他の工場労働に於ける年少者の地位に就ては、別項「労働事情」の内に略述する處あつたが、少年労働問題として注目すべき他の部門は、恐らく茲に一瞥せんとする給仕、商店小僧等の、技能の練磨を齎らざる、而して年齢の長ずると同時に放擲せざるべからざる労働であらう。尋常夜學校に於ける兒童の職業に就き檢するも、これ等の部門の労働は、通算して合計八七を算し、(A第一三五表)調査したる全數の約一五%を占めて居る。

蓋し肉體上よりするも、智能上よりするも猶未だ工業労働に堪えざる、且つ完全なる工業教育を享くべき資力を有せざる、多くの労働者子弟は、自ら晝間何等熟練を要せず、特殊の豫備智識を前提せざる労働に服し、夜間僅かに工業豫備教育を享くるのである。徒弟制度の崩壊が、熟練労働者養成の道程に投じたる問題は、勿論完全せる工業教育の一般化であり普及であらう。而して我國の現状がこれ等の問題の極めて等閑視せられつゝある例證に富める事否み得ないのであらう。

第四節 圖書館及幼稚園

圖書館は市の經營に成るものである。大正八年度の閲覽人總數六、一五七、一日平均閲覽圖書冊數一四二・六冊であつて、之を大正三年の二、二三三人、八五・八冊に比すれば相當の増加を示して居るが、工業労働者の殆ど總べてを占むる月島に於ては、労働條件の劣悪なる限り、圖書館が教育機關として、顯著なる職分を盡すことは、蓋し望み得られぬであらう。唯少數なるものが館外帶出に依て之を利用せるに過ぎぬであらう。

幼稚園は外人ハリネット、デスリーデ氏の經營する處にして、大正八年度在園兒童數男二七人、女三人、合計五九人であるが、例年兒童數は其前後である。父兄の職業は商業に従へる者二八人、工場労働者二三人、官公吏會社員八人である。

第三編 月島に於ける労働者の衛生状態

星 野 鐵 男

第一章 月島に於ける死亡原因

月島に於ての過去の衛生状態の一端を知るために明治四十二年より大正七年に至る十箇年間の死亡原因を調査した。

第一節 調査方法

調査の方法としては京橋區役所に至り埋葬認許書十箇年分を借受けその中より死因、死亡年月日、出生年月日、職業、住所の五項を寫取りて出生年月日と死亡年月日とより死亡時の年齢を算出した。

第二節 分類

年齢區分法は帝國死因統計に於けるやうに毎五年とせず毎十年とした。といふのはその總数が僅かに六、〇〇〇程であつたためにあまり細分せぬ方が取扱に便利であつたためである。死亡診断書中死因として二個以上の異種病名を併記してあつて何が真死因であるか不明のものは年齢、職業等を參考

してその中主なるものと思はるゝものを選び出して記載した。大正六年二月分の書類は同年の水難に
際し紛失して區役所にはなかつたので統計局の小票を借用して加へて置いた。

死因の分類は大中小の三分法によることにした。大分類は帝國死因統計に於けるものと同一で次の
十二種である。

- 一 傳染病及全身病
- 二 神経系の疾患
- 三 血行器の疾患
- 四 呼吸器の疾患
- 五 消化器の疾患
- 六 泌尿及生殖器の疾患
- 七 妊娠及産
- 八 皮膚及運動器の疾患
- 九 畸形及幼年
- 一〇 老 年
- 一一 外因に依る死

一二 不明の診断及不詳の原因

中分類としては次に掲げるやうなものを試みた。といふのは帝國死因統計に於けるやうに項目の多
いのは少數の此材料に於ては取扱煩雜であるためである。

- 一 急性傳染病
- 二 結 核
- 三 癩
- 四 花 柳 病
- 五 癌
- 六 脚 氣
- 七 栄養障害による疾患
- 八 中 毒
- 九 神経系の疾患
- 一〇 耳目の疾患
- 一一 心臓の疾患
- 一二 呼吸器の疾患

- 一三 消化器の疾患
- 一四 腎臓の疾患
- 一五 子宮の疾患
- 一六 皮膚の疾患
- 一七 小兒に固有なる疾患
- 一八 老 衰
- 一九 自 殺
- 二〇 外 傷
- 二一 不明の診断及不詳の原因

此分類に於ては九、一二、二一の如きは大分類その儘であるが之等の中より或るものゝみ抜出すことが面白くなかつたのでこのやうな形式をとつたのである。結核は肺結核及其他の結核、癌は諸臓器のもの全部、脚氣は乳兒脚氣を含んでゐる。外因による死のうち種々なる方法にて行はるゝ自殺を一括し又外傷を一括して掲げることにした。

小分類は帝國死因統計のものと全く同一である。唯「栄養不良」といふのは何れに屬すべきか不明であつたので又之が可なり多數なので獨立させて最後の欄に載せて置いた。

第三節 統計

統計は總て年次、體性、年齢、月、住所及職業等に依つて分ち實數と比例とを掲げることにした。明治四十二年一月一日より大正七年十二月三十一日に至る十箇年間の總死亡は六、一九八であつてその各年體性別を示せば次のやうになる。

B 第一號

計	性		年次
	女	男	
四七	二四三	二四二	四二
五〇九	二四三	二六七	四三
四九九	二六二	二三七	四四
四六八	二二四	二五四	元
六四〇	三三三	三〇八	二
六七六	三四四	三三二	三
八六六	四一一	四五五	四
六四八	二九三	三五五	五
七二三	三五〇	三八三	六
六九〇	三四〇	三五〇	七
六、一九八	三、〇三三	三、一八五	合計
六、一九八	三、〇一三	三、一八五	平均

大正四年の死亡が最も多數である。之は急性傳染病が非常に流行して斃れたものが多かつたためである。

別冊掲載の統計表に就て簡単に説明しつゝ、月島の死因に就き記述することにしよう。

B 第一表は體性及原因(大分類)に依つて分ちたる死亡表であつて實數表と比例表とを併記して置いた。比例は各年間の比例を示すものであつて原因間の比例ではない。十箇年平均に於いて各原因間の

割合はどうであらうか。實數を見れば大體に解るが百分比例を次に記して見やう。

傳染病及全身病	四一・六五
神経系の疾患	一一・八一
血行器の疾患	一・九八
呼吸器の疾患	一一・九六
消化器の疾患	一四・三〇
泌尿及生産器の疾患	四・三八
妊娠及産	〇・八四
皮膚及運動器の疾患	〇・四九
畸形及幼年	五・七一
老年	二・二九
外因に依る死	一・九八
不明の診断及不詳の原因	一・六一

此大分類表では内容は不明であるから之を知るためにはB第二表第三表によらねばならぬ。

次にB第三表中主なる死因を一瞥して見やう。急性傳染病の王なる腸窒扶斯は六、一九八中五八七

で死亡一〇〇〇に付九四・五五であり之に次ぐ急性傳染病なる赤痢疫痢は九九で一六・九七%となる。

慢性傳染病中の王は勿論結核で六、一九八中の一、二〇二(B第二表)でありそのうちで大多数は肺結核の九二六(B第三表)である。結核及肺結核の死亡千に對する比例は次のやうである。

結核	一九三・九三
肺結核	一四九・四〇

B第二表で次に大數を示すのは消化器と呼吸器の疾患にて斃るゝものである。前者は六、一九八中の八八五即ち一四二・七九%にて後者は八〇三即ち一二九・五六%となつてゐる。之が内容はB第三表を見ねばならぬ。之によれば消化器疾患にてはその大部分となるものは二歳未満の下痢及び腸炎(三一・六二・四五%)で呼吸器疾患にては肺炎(三一・五、五〇・八一%)及び氣管支肺炎(二三・七、三八・三七%)である。

かくして月島に於ける主なる死因を見れば次のやうなものである。

肺結核	一四九・四〇%
腸窒扶斯	九四・五五%
肺炎氣管支肺炎	八九・〇六%
下痢及腸炎	八八・〇九%

單純腦膜炎	六九・二五%
先天性弱質	四九・二一%
腦出血及腦卒中	三五・八二%
脚氣	三三・五六%
ブライト氏病	三二・九一%
榮養不良	二四・〇四%
老衰	二二・九一%
急性氣管支炎	一六・四六%
心臟器質的疾患	一六・三〇%

B第四表は原因大分類に於ての年齢關係を示すものである。どの年齢階級に最も高率であるかはいふまでもなく〇―五歳のものである。體性、年齢に依り十箇年平均の比例を示すことにしやう。

B第二號

性	年齢										
	0-1	5-10	10-15	15-20	20-25	25-30	30-35	35-40	40-45	45-50	計
男	四・三三	五・二三	九・九八	一〇・四六	七・六〇	六・〇三	七・四七	七・二八	三・八〇	〇・七三	一〇〇・〇〇
女	四・六九	五・四八	一〇・五五	一三・二四	八・九六	五・五二	四・九五	五・三四	三・八五	一・五三	一〇〇・〇〇

(年齢不詳〔男〇〇・二二〕〔女〇〇・一〇〕は省く)

之等の數が示す内容を語るものはB第八表及びB第十表である。B第十表に就て觀察することにしやう。最高率なる〇―五歳にて之が原因となるは次の疾患である。

單純性腦膜炎	男 一七七 女 一八一	下痢及腸炎	男 二二八 女 二一三
先天性弱質	男 一七〇 女 一三五	肺炎及氣管支肺炎	男 二二三 女 二〇一
榮養不良	男 六五 女 八二	脚氣	男 五三 女 三八

其他腸壑扶斯、麻疹等にて斃るゝのである。即ち之を概論すれば呼吸器消化器の疾患にて死亡するもの最も多く神経系疾患、傳染病、小兒固有の疾患によるもの之に次ぐのである。

次に率高きは一〇―三〇歳のものではいふ迄もなく結核を主因とするものである。之に次ぐは急性傳染病中腸チブスである。脚氣も亦見逃すことは出来ない。

四〇―六〇歳にては之が死因の主なるものはB第十表によりて知る如く癌、腦出血及腦卒中ブライト氏病等であり老衰も漸く加はり来る。老衰は七〇―八〇にて最多となつてゐる。年齢的關係は以上の如くであるが特に注意に價するは五歳未満の死亡殊にそのうちで消化不良榮養發育不全等の多き

ことである多くは三箇月未滿にて倒るゝのである。發育不全の如きは多く一箇月未滿にて斃るゝのであつて之は母胎内にありての榮養と大なる關係あり従つて母の榮養と關係密なるものがあるのではあるまいか（労働者家族榮養狀況參照）。尙注意すべきは結核にて斃るゝものゝ女に多き事である。即ち次のやうな對照となつてゐる。

一〇—二〇歳男一七五、女一七五、二〇—三〇歳男一三三、女一八四、三〇—四〇歳男一八七、女二〇二であつて一〇—二〇にては男一に對し女一・五、二〇—三〇にては男一に對し女一・四、三〇—四〇にては男一に對し女一・二を示すのである。一〇—四〇にては男三三五、女四六三であつて男一に對しては女一・四の割合に死亡するのである。

B第五表は死因大分類と月との關係を示すものであつて實數と一年平均一日死亡千に付各月平均一日死亡を示して居るのである。毎一年平均一日死亡千に付各月平均一日死亡を各月にて掲ぐれば次の如くである。

B第三號

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
男	九六三〇	九三三三	九四三五	一〇〇一七	一〇六五六	九三六七	一一六九二	一二五〇六	一〇九三五	一〇一〇一	七三〇二	七九九二

女	八四四五	八七六八	八五五〇	九三三二	一〇〇四九	一〇二八二	一一〇三七	一一三九八	一〇三六三	一〇三八三	八〇〇〇	九三〇六
---	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------

之に因つて觀ると死亡最も多き月は男にては七月の一二六九・一で女にては八月の一三〇九・八である。最も少きは男にては十一月の七三〇・二で女にては同じく十一月の八〇〇・〇である。七月八月に高率なるはB第九表によりて知る如く傳染病者の死亡非常に多い爲である、即ち七月では男一、四五五・五、女二、一七〇・一八月では男一、九五五・九、女二、三三五・一といふ程になつてゐるのである。それが十一月にあつては僅かに男四七〇・〇、女六一四・〇で四分の一程となる。尙七八月に高率なのは消化器の疾患、腎臓の疾患、外傷等による死亡率も高い爲である。比例の數字で定軌を逸したやうなものは實數が非常に少ない爲に起つた現象であるからそれ等に就いては云々することは危険である。外傷が夏に多いのは月島は水に近く水死をするものが多いことによるのである。

男女別に見れば一、二、三、四、五、九の月にては男死亡女死亡よりも高率であり他の六、七、八、十、十一、十二の月にありては反對に女の死亡率の方高いのである。之はどういふ譯であらうか。B第九表によれば大體に於て之が原因となるは急性傳染病及び結核による死亡のやうである。尙男女何れが多く死亡するかを見れば女死亡一〇〇に對する男の死亡は次のやうになるのである。（十箇年平均）

一月	一一〇・〇	二月	一一一・〇	三月	一二〇・九
四月	一一一・〇	五月	一一二・〇	六月	九七・二

七月	九五・五	八月	一〇〇・九	九月	一一二・六
十月	一〇三・八	十一月	九六・五	十二月	九〇・八

B 第六表は死因大分類と住所との關係を示すものである。住所とは月島全島を十個の區域に分つてその各々に就いて調べたのである。各區域の名稱及びその人口は次の如くである。人口は大正二年乃至同八年の七箇年の現在人口の平均である。

- 一 佃 島 二、〇六四
- 二 新佃東町 一、〇一三
- 三 新佃西町 五、六五〇
- 四 東海岸仲通一―六 三、九九〇
- 五 月島通一―六 四、〇五一
- 六 西仲海岸通一―六 八、九七六
- 七 東海岸仲通七―一二 一、八八一
- 八 月島通七―一二 二、七七六
- 九 西仲海岸通七―一二 六四六
- 一〇 三號地 常住のものなし。(地圖参照)

以上の區域の性質特徴等は各々異なるものがあることは第二編に述べられし通りである。人家稠密最も甚だしいのは第三區新佃西町と第六區西仲通とである。然して死亡率最も高きは第六區で次は第三區である。第四、第五區はその次である。

第六區	二八・五七
第三區	一七・〇九
第四區	一四・六二
第五區	一三・九七

人口と死亡との關係は各區域で如何であるかを二三の死因に就いてみれば次のやうである。

B 第四號

人口千に付ての死亡割合

	結 核	肺 結 核
佃 島	四二・六三	三四・四〇
新 佃 東 町	五六・二七	四三・四四
新 佃 西 町	三四・三四	二三・七二
東海岸仲通一―六	四二・六一	三二・五八

月島通	一一六	三九・七四	二九・八七
西仲海岸通	一一六	三八・四四	三一・二九
東海岸通	七一一二	三四・〇八	二七・六四
月島通	七一一二	三六・七四	二九・五四
西仲海岸通	七一一二	三〇・九六	二七・〇三
平	均	三五・四七	二九・九三

新田東町は不熟練労働者の住む所で衛生状態のよくない長屋の多くある所である。

B第七表は死因(大分類)と職業との關係を示すものでありそのaは職業の種類、bは職業上の地位、cは兩者を結合したものを示すのである。有業者は六一九八中一三一一であつてその種類及び地位の間の割合は次のやうである。

農	業	男	二〇	一・六八
農	業	女	二〇	一・七一
漁	業	男	三二	一・七一
漁	業	女	三二	一・七一
鑛	業	男	五六二	四七・〇七
鑛	業	女	五一	四三・五九
工	業	男	五六二	四七・〇七
工	業	女	五一	四三・五九

商	業	男	二五六	二一・四四
商	業	女	二九	三・四九
交	通	男	七五	六・二八
交	通	女	一	〇・八五
公	務	男	一八三	六・九五
公	務	女	一〇三	八・五五
其	他	男	一四六	一・二二
其	他	女	二〇	一・七〇
無	業	男	一一	〇・九二
無	業	女	一一	〇・八五

最多數は工業に關する六一三、之に次ぐは商業の二八五である。地位によつて分てば次のやうになる。

大	企	業	者	男	五	〇・四二
大	企	業	者	女	一	〇・四二
小	企	業	者	男	三三三	二六・二一
小	企	業	者	女	三四	二九・〇六
自	由	業	者	男	一一	〇・九二
自	由	業	者	女	四	三・四二
役	員	男	七四	六・二〇		
役	員	女	一	一		
勞	働	者	男	七七六	六四・九九	
勞	働	者	女	七七	六五・八一	
無	業	不	詳	男	一五	一・二六
無	業	不	詳	女	二	一・七一

最も多數なるは労働者で六五%程である。尙労働の種類によつて次の如くなる。

職業	性別	實數	比例
農業労働者	男	二〇	一・六八
農業労働者	女	二〇	一・七一
漁業労働者	男	一五	一・二六
漁業労働者	女	一五	一・二六
工業労働者	男	五〇四	四二・二一
工業労働者	女	四六	三九・三二
商業労働者	男	二二	一・八四
商業労働者	女	一一	〇・八五
交通業労働者	男	六五	五・四四
交通業労働者	女	一一	〇・八五
公務自由業者	男	六四	五・三五
公務自由業者	女	六四	五・三五
其他の労働者	男	一四六	一二・二三
其他の労働者	女	三〇六	二五・〇九

大半は工業労働者である。月島に於ての死因と関係ある職業は以上の如くである。かくの如き有様であるから死亡の大部分はやはり工業者、労働者、そのうちでも工業労働者が大部分を占めてゐる事はB第七表a、b。によつて明かに知るのである。B第拾壹表bを見れば急性傳染病にては労働者は男七七・二二で小企業者は男一三・五六である。他は云ふに足らぬ。結核に於ても労働者に最高率である、男五六・九六。小企業者では男二九・四三、女二七・二四である。尙役員男に一〇・七六がある。職業そのものと之等の死因とが直接関係するのであるか。彼等の住居状態と疾患とが直接関係するのであるか。恐らく後者であらう。住居状態榮養状態をよりよくしたならばかゝる現象は緩和されるのではあるまいか。不熟練労働

者の住んでゐる新佃に急性傳染病、結核の多きは之等の事を物語つてると見て差支ないやうに思ふのである。數は極少ないのではあるが花柳病、脚氣、榮養異常による疾患、外傷等による死亡は労働者の一手販賣の如き觀を呈してゐるのである。更に細かい分類はB第拾參表に就いて見るべきである。前述の各種労働者の間には如何なる関係があるか左に腸窒扶斯と肺結核に就いて掲げることにしやう。

B第五號

職業	腸窒扶斯		肺結核	
	實數	比例	實數	比例
農業労働者	一	〇・五〇	二	一・二六
漁業労働者	一	〇・五〇	一	〇・六三
工業労働者	一〇五	五三・三四	一三六	八五・七一
商業労働者	八五	四三・二九	三	一・八七
交通業労働者	八	三・九六	三	一・八七
公務自由業の労働者	二	一・〇〇	四	二・四八
計	二〇二	一〇〇・〇〇	一六一	一〇〇・〇〇

腸窒扶斯にては工業商業労働者間に大なる差はないが肺結核では工業労働者が非常に高率なのである。取扱つた數が少ないから之で直ちに断定する事は出來まいが大體の傾向として工場労働に従事す

るものが肺結核で斃れるといふ事が解ると思ふのである。
 以上は有業者に就いてあるが無業者にても労働者の家族のものに死亡率高いことは推定され得るのである殊に乳児の死亡に於てそうである。

第四節 法定傳染病

茲に記述しやうとするものは以上述べた所とは關係ない。大正二年より七年に至る六箇年（それ以上の材料なし）の法定傳染病が如何なる状態にて月島に流行したかを知る爲に月島警察署に行きて材料を得それより發病者の體性、年齢、發病年月、住所、轉歸等を調べたものである。B第拾四表は之の體性及年齢に依つて分ちたるものである。それに轉歸を記入して置いた。年齢は一〇—三〇歳のものが最も罹かるのである。がその大勢を決するのは腸窒扶斯であるからかくの如くなるが赤痢、疫痢、猩紅熱、實布埤利亞等は一〇歳未満のものに多く來るのである。死亡の轉歸をとるものもその率幼年者に高いのである。

何月に最も多く發生するかといふに通則の如く七八九の三箇月に最も多いのである。發疹窒扶斯は春に發生してゐる。住所としては前述の如く第六區第四區第三區に多いのである。月と住所との關係の表は省いてある。六箇年間に發生した傳染病の總數を體性別にあげることにしやう。

B 第六號

死亡者	罹患者		大正二年	三年	四年	五年	六年	七年
	計	女男						
計	三一	一八四	三一	二八	六三	三四	二五	二五
			五七 六二	七二 五七	一一 一一	二五 二八	三七 三九	三五 二七
			一一 一九	二九 一一	四三 二四	八二	七六	六二

而してその大半は腸窒扶斯である。大正四年の如き二四三中腸窒扶斯は二一六の大多數を占めてゐるのである。